源氏物語論

——嗅覚美形成——

目加田　さくを

源氏物語では、所謂、臭気とみなされている嗅覚については、

○風病重きにたへかねて極熱の草薬を服していとくさきによりなむ、えたいめたまはらぬ、この香うせなん時に立ちよらせ給へ……その匂ひさへはなやかにたちそへるもすべなくて　（帚木）

「すべなく」「いとくさき」匂いとして、又

○よべのは焼けとほりてうとましげに焦がれたる匂ひなどもことやうなり御衣どもに移り香もしみたり　（眞木柱）

焼け焦げの「うとましげな」匂いとして、又

○紙魚といふ虫のすみかになりて古めきたるかびくささながら　あとはきえず　（橋姫）

古紙の黴くさい匂いとして形成するにとどまる。枕草子の場合と、全くことなるところである。[註(1)] 源氏物語では、所謂、香気ある匂いに限定される。

源氏物語の嗅覚美形成を、次の項目を逐って見てゆこう。

Ⅰ　薫物（たきもの）

(A)　薫香の美

(B)　衣服にたきしめた薫香の美

(C)　紙・扇にたきしめた薫香の美

(D)　空薫物の美

(E)　名香の美

Ⅱ　植物の香気

Ⅲ　体臭の香気

Ⅳ　反魂香

Ⅴ　移り香

Ⅵ　しめり・ぬれの美

Ⅶ　追　風

Ⅰ　薫物（たきもの）——ねり香——の美

(A)　薫香の美

太政大臣源氏が、栄華を極めた時期、その幸福な生の象徴として催すのが香合である。一人娘明石姫の裳着、春宮妃入内に備えて、よりすぐった香木類を届けて、逸品の薫香調製を依頼する。源氏物語世界では、最高の芸術品—(書・絵・香・歌・詩)—は、それぞれの道の人、専門家では作れない、最高の階層・教養・感性・心情の人でなければ創造できないとする、甚だ伝奇的なのである。

六條院は、前斎院をはじめ貴婦人達に二種づつ調合を依頼した。

届けられた香は、すべて逸品ぞろい、そこで、六條院は春の御殿の寝殿で香合を催す。判者は源氏につぐ芸術家兵部卿の宮。宮の判定の結果、それぞれ優勝が、次の理由できまる。

黒方（香名）　前斎院（作者）　判詞　心にくく　しづかなる匂ひ殊なり

侍従　源氏　すぐれてなまめかしくなつかしき香なり

梅花　紫上　はなやかに　今めかしう　すこしはやき心しらひを添へて珍らしき薫り　くはさま変りしめやかなる香して　あはれになつかし　はれり　この頃の風にたぐへんにはこれにまさる　匂ひあらじ

荷葉　花散里　すぐれてなまめかしくなつかしき香なり

薫衣香　明石　世に似ずなまめかしきをとりあつめたる心掟すぐれたり

判定が終る頃　月さし出でぬれば御御酒などまゐり給うて昔の御物語などし給ふ。霞める月の影こゝろにくきを雨の名残の風、すこし吹きて、花の香なつかしきに、おとどのあたり、いひ知らず匂ひみちて、人の御心地ども、いと艶なり。

と、馥郁と漂う香気によって、此の世最高の美の世界が、形成される。それは同時に、芸術至上主義的な源氏の生、彼が願う幸福の形成であった。製作者は、春の香梅花は春の御方紫上、夏の香荷葉は夏の御方花散里、秋の香侍従は源氏、冬の香黒方は前斎院、季のない薫衣香は明石で、調製した人物の個性、品格がその作品にそのまま具現されるとすること、書の場合と、同様である。

六條御息所　心にも入れず走り書き給へりし一行ばかりわざとならぬをえてきはことに　おほえしはや

秋好中宮　宮の御手は　こまかにをかしげなれど　かど　オやおくれたらん

藤壺　故人道の宮の御手は　いと気色ふかく　なまめいたるすぢはありしかど　弱き所つきて　匂ひぞ少なかりし

院の尚侍（ないしのかみ）　今の世の上手におはすれど　あまりそほれて　癖ぞ添ひ給へる

紫上　にこやかなかたの　御なつかしさは　殊なるものを

兵部卿宮　いとすぐれてしもあらぬ御手を　ただ　かたかどに　いといたく筆すみたる気色ありてかきなし給へり

左衛門督　かど〳〵しく賢げなる筋をのみ好みて書きたれど筆のおきて澄まぬ心地していたはり加えたる気色なり歌などもことさらめきてえりかきたり

宰相中将　夕霧　の葦手の冊子水のいきほひゆたかに書きなし　そゝけたる葦の生ひざまなど難波の浦にかよひて　こなたかなたいきまじりて　いたうすみたる所あり又いといかめしうひきかへて文字様石のたゝずまひ　好みかき給へる枚もあり

すぐれた芸術作品は、小手先の技巧で創出されるものではない。作者の生、そのまゝの投入であり、したがって創り出された作品は作者　そのものを象徴するというのが、紫式部の考えである。何れも、八條式部卿宮の秘伝を承継した貴婦人達、「不伝男耳」といわれた秘法を、どうして継承したか源氏も、同じ秘法によりながら、そこに独自の工夫がなされて出来上った作品群、という。

黒方は、源氏、前斎院、紫上達に合わされたものであろうが、前斎院の作が勝。前斎院の品格、教養、の故で、抜群に「心にくくしづかなる匂い」、というのである。梅花は、紫上、前斎院、或は源氏も、製作したであろう。春の香は、人柄からいっても春の御方紫上にぴったりである。果せるかな、華やかでモダーン、才気が感じられる珍らしい匂い、という。つまり、梅花、荷葉、侍従、黒方、薫衣香、それぞれ、幾多の、各人各様の薫香が製作されるのだという。紫式部の鋭敏な嗅覚美追求がなせる造型である。それが、伝奇的ともいえる作家の個性を具現した華麗な薫香の美形成となった。

薫香でそれをたきしめた人物の人柄、個性を、たとえば、近江君

の場合、「いと甘えたる薫物の香をかへす〳〵たきしめ給へり」と、活写するのである。

(B) 衣服にたきしめた香の美

㋑ややとのたまふにあやしくてさぐりよりたるにぞ、いみじく匂ひみちて　顔にもくゆりかゝる心地するに思ひよりぬ　（帚木）

㋺おしのごひ給へる袖の匂ひも、いと所せきまで薫りみちたるに　（夕顔）

㋩上着には黒貂（ふるき）の皮衣、いと清らに香ばしきを着給へり　（末摘花）

㋥さゝめきごとの人々は「いとかうばしき香のうちそよめき出でつるは冠者の君のおはしつるとこそ思ひつれ　（乙女）―内大臣

㋭世とともに物を思ひ給ふけにやせ〳〵にあえかなる心地してうちとけ給へるまゝの御袖のあたりもなよびかに、けぢかうしみたる匂ひなど　とりあつめてらうたげにやはらかなる心地したまへり　（夕霧）―落葉宮

㋑㋺は源氏、㋩末摘花、㋥は内大臣、㋭は落葉宮、が衣にたきしめた香が形成する美的雰囲気である。これは極く普通の場合で、頻繁に形成されるところ。数例をあげるにとどめる。

(C) 扇・紙にたきしめた香の美

①白き扇のいたうこがしたるを、これにおきてまゐらせよ、枝も情けなげなめる花を　（夕顔）

②陸奥紙の厚ごえたるに匂ばかりは深うしめたまへり　（末摘花）

③鈍色の紙いと香ばしう　艶なるに墨つきなどまぎらはして　（澪標）

④唐の紙のいと香ばしきとうでて　（玉鬘）

⑤唐の縹の紙のいとなつかしうしみ深う匂へるを　（胡蝶）

⑥紙の香などいと艶に殊更めきたるかきざまなり　（若菜）

①は夕顔咲く家の女達のしわざで、なかなか洒落たやり方、と源氏に思わせる美的行為の演出。

②は、女文に不似合いな厚ごえた陸奥紙、歌も陳腐、流石、料紙に香だけは深くたきしめてある、と皮肉に扱う。その香の美は問題にされず、型通りのやり方と嘲笑する素材となる。教養人にとって、手紙の料紙に香をたきしめる芸術的行為は常識となっており、そのやり方の如何が問題にされる。

③しめやかに優艶な前斎院の美的雰囲気形成。

④六條院のたしなみ、教養の深さの美的形成。

⑤⑥柏木の文、なつかしう艶なる柏木の美的雰囲気を形成する。これらも、極く普通の場合で頻出する。

○ありしながらの御手にて　紙の香など例の世づかぬまでしみたり　（夢浮橋）

は薫の体臭がしみた紙の美が、薫のつきぬ思を小野の庵室まで運ぶ。艶なる雰囲気形成である。

(D) 空薫物の美

①南おもて清げにしつらひ給へり。空薫物心にくく、薫りいで、名香の香など匂ひみちたるに　（若紫）

北山の僧都の庵室。ここに住む若紫の君の祖母君が、佛前には名香を、室内には空薫物をくゆらしている様子をのべる條で、尼君の優雅な日常が具象的に香高く表現される。

②空薫物いとけぶたうくゆりて、衣のおとなひいと花やかにうちふるまひなして、心にくく奥まりたるけはひは立ちおくれ今めかしき事を好みたるわたりにて…　（花宴）

右大臣邸の藤花宴に招かれた光源氏が、「いたう酔ひ悩めるさまにもてなして」坐を立ち、寝殿の東の戸口に「寄りゐ給」いて、妻戸の御簾を引き着て女房に話しかける場面。女宮達や右大臣の姫達―

朧月夜姉妹―が、「物見給ふとてこの戸口は占め給へるなるべし」と見当をつけて、「扇をとられてからきめをみる」と言いかける。右大臣邸の、奥ゆかしく落ちついた気風は乏しく、モダーンで派手、華やかな雰囲気を、同じ空たきものをくゆらすにも、「いとけぶたうくゆりて」と具象的に表現する。凝った心にくい形成である。明石の御方の部屋、源氏のやり方③とは対象的に形成する。

③いといたうして、空薫物、心にくきほど匂はして、つくろひおはするさま…（梅枝）

源氏による最高の美的雰囲気設定の玉鬘の部屋に、兵部卿の宮は「心をとめ給へり」と、前段階。次に放たれた蛍の光に映し出される豊麗な玉鬘をみるにいたって、――完璧な美的世界現出に――宮の恋着は決定的となる。蛍を放つ前に「心にくきほど」に匂わした空薫物で宮を感動させておかねばならないのである。

④臥したまへり。御座のあたり、物清げに、けはひ香ばしう、心にくゝ、ぞ住みなし給へり。

病床にある貴公子柏木の優美な雰囲気は、御座のあたりは、さっぱりと整頓され、「けはひ香ばしう…」、空たきもの、衣々の香、その馥郁たるにおいが漂うことによって形成される。

⑤うちとけしめやかに、御琴どもなど弾き給ふ程なるべし……はしつかたなりける人のゐざり入りけるけはひどもしるく、衣のおとなひも、おほかたの匂ひかうばしく心にくき程なり（横笛）

夕霧が一条宮を訪れると、南の廂に招じられる。端にいた女房が奥へいざり入る衣ずれの音、空たきものの奥ゆかしい匂いに、御息所、落葉宮の優艶な生が、いきいきと現出される。Ⓐ

⑥火取どもあまたして、けぶたきまであふぎちらせば、さしよりて、空にたくは、いづくの煙そと思ひわかれぬこそよけれ

女三の宮の部屋で、空だきものを、けぶたきまであふぎちらしている女房らを、源氏がたしなめる。源氏の美意識による空だきものはⒶでなければならぬ、というのである。幼稚な女三の宮の裁量――（女房らの行為は主人の意向を酌んで、とみなされるから）――のままでは、六條院の美を壊すこととなるのである。

最高の美的生活を希求する源氏は、衣服にたきしめる香、佛前の名香、空たきもの、料紙、扇、屏風等々にたきしめる香、何れにも細心、入念な配慮をはらった。つまり、嗅覚美形成は、視覚美形成、聴覚美形成、触覚美形成、と共に、重視されているのである。

貴族、教養人、ことに貴婦人の部屋は、必ず空だきものがくゆらされていなければならなかった。しめやかに奥ゆかしくか、派手にか、華やかにか、強烈にか、どこでたくのかわからぬほどうっすらとか、それは、その主の教養、趣味、人柄に依る、と式部は考える。空だきもの、これは基調となる。その上で、そこに登場する人物は香をたきしめた衣を身につけ、香ばしい扇、料紙を手にする、動作につれて追風が、複雑に交りあい漂う馥郁たる匂い、それで登場する人物の品格がおのづと現出する事となる。

(E)　名香の美

名香は佛前に焚く香である。

①空薫物心にくく薫りいで、名香の香など匂ひみちたるに君の御追風いと殊なれば（若紫）

若紫で、僧都の庵室は、空だきものが奥ゆかしく漂い、佛前の名香の香がまじって匂いみちている舞台、そこへ主役の源氏が招ぜられてくると、素晴しい追風も加わる―三重の、最高の嗅覚美形成である。

十二月十余日、法華八講の結願の日、藤壺出家、驚きと悲しみに打ちひしがれた源氏が訪う場面である。空だきものは物深き黒方、そこへ佛前の名香がくゆっている、伺候した源氏の三の匂ひ、と、ここも三重三種の香の美形成で、悲痛な美の場面を創出する。

六條院では、夏頃、「入道姫宮」の持佛開眼供養が催される。佛前の香として唐舶載の薫衣香—（百歩香ともいう）—がたかれている。又夏季とて、荷葉香の調合を加味した名香—（蜜を少なめにまぜあわせた）—がたかれ、一つに匂いあうている、前述のように、それも、強くたきすぎないように源氏はたしなめたのだが、二十四、五歳、うら若き入道宮の佛前荘厳としては、名香は、このように、しめやかに、かつ華やかでなければならない。

さて、名香に、事件展開上、重要な役割を与える場合。作者設定の手並をみよう。

○名香のいとかうばしく匂ひて、榲のいとはなやかに薫れるけはひも、人よりはけに佛をも思ひ開え給へる御心にて、わづらはしく、「墨染の、今更に、をりふし、心いられしたるやうに、あはゝしく、思ひそめしに違ふべければ、かゝる忌なからん程に、この御心にも、さりとも、すこし、たわみ給ひなん」など、せめて、のどやかに思ひなし給ふ。

八宮の死後、「屏風をやおら押しあけて」大君の寝所に侵入した薫は、「心にくき程なる火影に御ぐしのこぼれかゝりたるをかきやりつゝ見給へば」と、接近し、つのる思いを訴えつづけるが、「佛前の名香の香と、榲のかをり」にハッと我をとり戻し、しいて激情をおさえ、一線を越えることはなかった。この為に、薫にとって、彼の死まで生涯つづくであろう遂げられぬ恋の悩みが始まる。宇治十帖の主題に、深くかかわるのが、薫の激情にまかせての行為を阻んだ名香、榲の香である。作者の芸の冴えである。

Ⅱ　植物の香の美

前述のように、源氏物語では、普通の意味のいい香、に限られる。

①廿日の月さしいづる程に、いとゞ木高き除ども木暗うみえわたり、近き橘の薫りなつかしう匂ひて、女御の御けはひ、ねびたれどあくまで用意あり、あてにらうたげなり……
たちばなの香をなつかしみ郭公花ちる里をたづねてぞとふ　（花散里）

②艶なる程の夕月夜に……形もなくあれたる家の木立しげく森のやうなる過ぎ給ふ。大きなる松に藤の咲きかゝりて月影に騒きたる、風につきて、さと匂ふがなつかしくそこはかとなき薫りなり。橘には変りてをかしければ　（蓬生）

③梅の香も御簾のうちの匂ひに吹きまがひて、生ける佛の國とおぼゆ　（初音）

④花の香さそふ夕風、のどやかにうち吹きたるに、御前の梅やう〳〵ひもときて　（初音）

⑤箱のふたなる御菓物のなかに橘のあるを、まさぐりて
「橘のかをりし袖によそふれば変れる身ともおもほえぬかな」
「袖の香をよそふるからに橘の実さへはかなくなりもこそすれ」　胡蝶

⑥吹きくる追風は、紫苑こと〴〵に匂ふそらも、香の薫りも、ふればひ給へる御けはひにや　（野分）

⑦「九重にかすみへだてば梅の花たゞかばかりも匂ひこじとや」
「かばかりは風にもつてよ花の枝にたちならぶべき匂ひなくとも」　（眞木柱）

⑧御まへ近き紅梅さかりに、色も香も似るものなきほどに…
「花の香は散りにし枝にとまらねど移らん袖にあさくしまめや」

「花の枝にいとゞ心をしむるかな人のとがめむ香をばつゝめど」……
霞める月の影、こゝろにくきを、雨の名残の風、すこし吹きて、花の香なつかしきに、おとゞのあたり、いひしらず匂ひみちて、人の御心地ども、いと艶なり　……
「色も香もうつるばかりにこの春は花さく宿をかれずもあらなん」…
「花の香をえならぬ袖にうつしてもてことあやまりと人やとがめん」　（梅枝）
⑨紅梅の末にうちなきたるを
「袖こそ匂へ」と花をひきかくして…花といはば、かくこそ匂はまほしけれども、桜にうつしてば、又ちりばかりも心わくる方なくやあらまし　（若菜上）
⑩この藤よいかに染めけん色にか。なほえならぬ心添ふにほひにこそ。
⑪「香をとめて来つるかひなくおほかたの花のたよりといひやなすべき」
紅梅の下にあゆみ出で給へる御さまのいとなつかしきにぞ、これよりほかに見はやすべき人なくやと見え給へる。花はほのかにひらけさしつゝをかしき程の匂ひなり　（幻）
⑫五月雨はいとゝなかめくらし給ふよりほかのことなし、さう〴〵しきに花たちばなの月影にいときはやかに見ゆる薫りも追風なつかしければ…十余日の月はなやかにさしいでたる雲間のめづらしきに、大将の君御まへにさぶらひ給ふ　（幻）
⑬「心ありて風の匂はす園の梅にまづ鶯のとはずやあるべき」……
えだのさま、花房、色も香も世の常ならず　園に匂へる紅梅の色にとられて香なむ白き梅には劣れるといふめるを、いとかしこくとりならべても咲きけるかな……
花もはづかしく思ひぬべく香ばしくて、けぢかくも臥せ給へるを…
「花の香にさそはれぬべき身なりせば風のたよりをすぐさましやは」……
「花の香を匂はす宿にとめゆかば色にめづとや人の咎めむ」……　（紅梅）
⑭「折りて見ばいとゞ匂ひもまさるやとすこし色めけ梅の初花」
「よそにては　もぎ木なりとやおもふらむ下に匂へる梅の初花」
などいひすさぶに、まことは　色よりも、とくち〴〵…
紅梅の木のもとに梅が枝をうそぶきてたちよるけはひの、花よりもしるくさとうち匂へれば…
「折からや　あはれもしらん梅の花たゞかばかりに移りしもせじ　（竹河）
⑮名香のいとかうばしく匂ひて橘のいとはなやかに薫れるけはひも　（總角）
⑯例の御心よせなる梅の香をめでおはする、下枝をおし折りてまゐり給へる……
「折る人の心にかよふ花なれや色にはいでず下に匂へる」　（早蕨）
⑰御前近き紅梅の色も香もなつかしきに……風のさと吹き入る、に花の香もまらうどの御匂ひも　橘ならねどむかし思ひいでらる、…
「見る人もあらし」に迷ふ山里に　むかしおぼゆる花の香ぞする」
「袖ふれし梅はかはらぬ匂ひにて根ごめうつろふ宿やことなる」　（早蕨）
⑱お前近き橘の香のなつかしきに時鳥の二声ばかりなきてわたる
「たちばなのかをるあたりは時鳥心してこそなくべかりけれ」　（蜻蛉）
⑲閨のつま近き紅梅の色も香もかはらぬを春や昔の　とこと花よりも……
袖ふれし人こそみえね花の香はそれかと匂ふ春のあけぼの　（手習）

橘①⑤⑫⑱
藤⑳
梅③④⑦⑧⑨⑪⑬⑭⑯⑰⑲
紫苑⑥　藤袴Ⅲ①
樒⑮

橘は、万葉集において、六十九首、第三位と、多く詠まれ――（一位萩百三七首、二位梅百十九首、四位桜四十二首）――『橘の花散里のほととぎす』八1473　『橘の花散里に』1978、『橘の花散庭』1968と、美しい造語が出来上っていた。源氏でもこれをうけて①の歌が詠まれたし、又、当時人口に膾炙していた名歌古今集夏139　『五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする』を援引して⑤を創出した

のである。古来、なつかしまれた花橘は、梅についで多いが、大差がある。式部は梅に、紅梅に、その色と香に源氏物語世界の美形成を托したのである。

藤の香②の美形成も、見事であるが、紫苑、藤袴と共に極く普通のものであるから抄畧する。樒の香は、前述のように、所謂の花のよき香ではなく、その佛にかかわる香として、名香と共に、重要な契機として用いられた事は前述した。源氏物語で、花乃至花の香で最も重視するのは梅である。

春の御方紫上は紅梅を愛した。彼女は「わが御殿と思す二條院」で、三の宮を「前に据ゑたてまつりて」遺言をする。

大人になり給なば、ここに住み給ひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花の折〳〵に心とゞめてもてあそび給へ。さるべからむ折は、佛にもたてまつり給へ

彼女の死後、二月になれば、花の木どもの盛りなるも、まだしきも梢をかしう霞みわたれるに、かの御形見の紅梅に鶯のはなやかに鳴きいでたれば……

源「植ゑてみし花のあるじもなき宿にしらず顔にてきぬるうぐひす」（御法）

形見の紅梅、なのである。枕の草子は「木の花はこきもうすきも紅梅」と第一に紅梅をあげた。梅ヶ枝の巻、紅梅の巻、を設ける程、式部も紅梅を重視する。梅ヶ枝の巻、六条院春の御殿、「御前近き紅梅盛りに色も香に似るものなき程」に香合せの舞台を設定する。馥郁たる紅梅の香漂う殿で、逸品の薫香が焚きあわせられる。判定が終り、酒宴となる。雨上りの風が少し吹いて「花の香なつかしきに」御殿内には薫香の匂いがみちて、人々は陶然たる思いである。それを「艶なり」という。優艶の極致の世界を創りあげるのである。

紅梅の巻では、按察大納言邸は七間の広い寝殿、東に故蛍兵部卿の宮の遺児、宮の君が住んでいる。「東のつまに軒近き紅梅のいとおもしろく匂ひたる」をみて、大納言は一枝手折らせて若君を、匂宮の許にいだしたてる。この紅梅は枝のさま、花房、色も香も世の常ならず美しい。宮は紅梅は美しい色に力をとられて香は白梅に劣るというようだが、この紅梅は色も香もすばらしい、とめでる。大納言のおもわくは外れ、宮は大納言の姫君には関心を示さない。宮がほのかに慕ふのは宮の君だが、宮の君は結婚を思いはなれていた…と、花やかでしめやかな物語が設定される。紅梅の雰囲気—

梅ヶ枝の巻も、客は判者の兵部卿宮一人という、ごく内輪の香合せである。御法の巻の紅梅は、臨終間近の紫上と、亡き紫上を偲ぶ源氏にかかわる。何れも、しめやかな華やかさの美を形成する紅梅の色、香である。強く凛然たる花橘の香ではなく、和やかにほのかに漂うなつかしい紅梅の香に依る形成を、式部は意図したのである。

Ⅲ　体臭の美形成

紫式部は、体臭の美を形成した。しかも、後篇の主人公薫の体から放つ生得の香気とする。格別の思い入れがあってのことと察せられる。

①（薫は）げに（佛菩薩が）さるべくて、「いとこの世の人」とは、作り出でざりけり。「假に、やどれるか」と見ゆること、そひ給へり。……

x この世の匂ひならず。あやしきまで、うちふるまひ給へるあたり、遠く隔たる程の香のかうばしさぞ、追風も、まことに、百歩の外もかをりぬべき心地しける。……（薫は）かくかたはなるまで、うち忍び立ち寄らも（依臭の）物の隈も、しるきほのめきの、隠れあるまじき、うるさがりて、y をさ〳〵（香を）つけ給はねど、あまたの御唐櫃に埋もれたる香の香どもも、（薫）この君のは、いふよしもなき匂ひを加へ、z 御前の花の木も、はか

なく袖ふれ給ふ梅の香は、春雨の雫にも濡れ、身にしむる人多く、秋の野に主なき藤袴も、もとのかをりは隠れて、なつかしき、追風殊に、をりなしからならむ、まさりける。（昔の）（藤袴の香は）かくいと怪しきまで、人の咎むる香に、（休が）しみ給へるを、兵部卿の宮なむ異事よりもいとましく思して、それはわざと、よろづの勝れたるうつしをしめ給ひ、朝夕のことわざに、（薫物を）あはせいとなみ、御前の前栽にも……わざとめきて香に愛づる思ひをなむ、（匂は）たてて好ましうおはしける。（句宮）

薫の体から漂う匂いは、x此の世の物ではない。薫は、その体から牛頭栴檀の香気を発散した佛、菩薩の、假に此の世に出現した化身か、というのである。薫は、薫香をたきしめたりはしないのである。人の心に、いい香気を移す筈の、香り高い梅も藤袴も、薫がふれることによって、一層、香気を増す、という。

②源中納言は、かうざまに好ましうは焚き匂はさで、人からにこそ世になけれ。あやしうさきの世の契りかなりける報いにか（紅梅）

その香気の強さは　後掲（追風⑧）、彼が馬で通りかかると、通路ぞいでは、彼の追風で、「主しらぬ香」と、ハッとおどろいて目覚める家々があったという程。薫に貰った狩衣は、あまり香が強くて、下賤な身には不似合なので、すすいで匂いをおとそうとするが、なか〳〵消えず、迷惑したという造形。それは尋常ではない。明瞭に作者は示す。

③より居給へりつる眞木柱も菌も、名残にほへる移り香いへば殊更めきたるまでありがたし…経などよみて功徳のすぐれたることあめるにも、香のかうばしさを、やむごとなきことに佛のたまひおきけるもことわりなりや。薬王品などにも、とりわきてのたまへる牛頭栴檀とかや、おどろ〳〵しき物の名なれど、まづかの殿の近く振舞ひ給へば、仏は眞事したまひけりとこそおぼゆれ（東屋）

作者がいうところの薬王品本文は、次の條である。

妙法蓮華経　薬王菩薩本事品　第二十三

宿王華ヨ。此菩薩。成二就如レ是。功徳智慧之力一。若有レ人。聞二是薬王菩薩本事品一。能随喜讃善者。是人ハ現世ニ口中ヨリ常ニ出二青蓮華香一。身毛孔中ヨリ常ニ出二牛頭栴檀之香一ヲ。所レ得功徳。如上所レ説。是故宿王華。以二此薬王菩薩本事品一ヲ。嘱二累於汝一。我滅度後。後五百歳中。広宣流布シ。於二閻浮提一無レ令下断絶セシメテ。悪魔。魔民。諸天。龍。夜叉。鳩槃荼等。得中其便ヲ上。宿王華ヨ。汝当シト以二神通之力一。守中護是経上。

薫は、さしづめ、前生において、薬王菩薩本事品を聞いて、よく髄喜讃善した、その為に、口中から青蓮華を出し、牛頭栴檀之香を身毛孔中から発散している、まのあたりの証例だというのである。（夢の浮橋）

④ありしながら（薫の）の御手にて紙の香など例の世づかぬまでしみたり

したためた手紙にも、此の世のものとも思われぬ例の薫の体臭がしみこんでいるという。

作者は、何故、このような造形をしたか。

源氏物語前篇において、主人公源氏は、桐壺の巻では　世になく清らなる玉の男御子であり、名高うおはする宮の御かたちにも、なほにほはしさはたとへん方なく美しげなるを、世の人、「光る君」と聞ゆ、であって、美貌の最高を意味する表現はするが、異様、超人間の美、とはしない。現実世界において世にも稀な、二人とあるまじき視覚美である。後篇になると、容姿、視覚美は前篇の光源氏に及ばないが、嗅覚美は抜群、人間界を超えた極美となる。人間美形成にあたって、作者紫式部が、リアルの世界、写実で終始せず、一歩すすめて、伝奇性に迄ふみ入ったのは、何故であろうか。

結論は『薫に一層、理想像を賦与する為』、である。伝奇小説となり了らない為に、作者の配慮がある。薫も匂もその美貌は光源氏に

は及ばないとする。現実性を、しっかとすえる。匂は、負けじと薫香をたきしめる。薫の恋は、決してめでたしめでたし、では終らぬ。

作者は、前篇における光源氏が人間界の理想像、かくありたいと万人がねがう人間、われらの代表選手　であったように、後篇における薫は、（香気の点を除けば、）光源氏なぞより、もっと身近な、われらの代表選手、かくありたき、好ましい男性像である。その純粋、眞摯、誠実な人格は、前篇光源氏を卒業した読者にとって、満足のいく主人公である。後編になると、読者は、もう、光源氏や匂宮では満足しない。「まあ、まあ、結構な御身分で、のんきでいいことさ、」と、そっぽを向く。後篇では、運命に翻弄される薫、大君、浮舟は、思い悩み、考えぬく。甚だ近代的人間が形成される。にもかかわらず、なぜ薫に、超人間的香りを設定したのか。

十世紀、十一世紀は、洛中は法華経に汚染されていた、と筆者は冗談を申しているところ。あいつぐ法華八講、末世思想の伝播、法華経に式部は深くなじんでいた。釈尊こそは宇宙の絶対者であった。世にある時、悉達太子は、人間が生老病死の苦厄から、いかにすれば免かれることが出来るか、出家してその道を求めた。しかし、釈尊すら死んだのである。生老病死、すべて、釈尊もキリストも、いかなる絶対者も免れることは出来ない。つまり、絶対者ではありえない。人間である以上は、宇宙の生物であるうちは。式部は、その読みの故に、悉達太子にも比すべき理想の人間薫——（佛・菩薩のもつ牛頭栴檀香をその身孔毛中より発する）——を造形し、彼が悩みぬく様相を創出したのである。生老病死、心の病・恋によって人間は苦しみ、よろこび、悩みぬき、永久の平安に安らぐことは出来ない。眞摯・純粋・素晴らしい薫ですら、まして凡庸な者達は、と作者は、読者に告げる。

Ⅳ　反　魂　香

○人の國にありけむ香の煙ぞいとえまほしく思さる　（總角）

○昔ありけん香の煙につけてだに　（宿木）

漢の武帝が、方士に命じて調製させ、焚かしめ、亡き李夫人が現れたという反魂香に言及したのは、宇治十帖に入ってからである。前篇でも、光源氏は愛する夕顔、藤壺、紫上を亡くしたが、紫の死後も「夢にても、又いかならん世にか」とは思っても、反魂香をえまほしく思ったとはしない。総角の巻では、優婆塞の生活をおくり、最后は山の阿闍梨の寺で往生した父八宮を夢にみた中の君が、大君と語らふ場面で、二人が反魂香を「いと得まほしく思さる」、というものである。そもそもこの八宮に佛法を問いに宇治を訪れたのであった信仰心篤い、宿木では、亡き大君を思う薫が「昔ありけん香の煙につけてだに今ひとたびあひ見たてまつる物にもがなとのみ思えて」、皇女降嫁に一向気のりしない、という。宇治十帖に　此の伝奇的な香　を登場させるのは故なしとしない。

Ⅴ移り香・残り香、の美形成

㋐かの薄衣は、小袖の、いとなつかしき人香にしめるを、身近くならして見居給へり　（空蟬）

㋑かの御移香のいみじう艶にしみかへり給へれば「をかしの御匂いや。御衣はいとなえて」と心ぐるしげにおぼいたり　（若紫）

㋒ほの見たてまつり給へる月かげの御かたち、猶、とまれる匂ひなど、若き人々は身にしめて過もしつべ

くめで聞ゆ　（賢木）

㋓御身に馴れたるどもをつかはす。げに今ひとへしのばれ給ふべきことを添ふる形見なめり。えならぬ御衣に　y　匂ひの移りたるをいかゞ人の心にもしめざらむ　（明石）

㋔うちしめりたる御匂ひ、ⓐとまりたるさへうとましくおぼさる。人々御格子などまゐりて、「ⓑこの御簀の移り香、いひしらぬ物かな」…ときこえあへり。　（薄雲）

㋕名残までとまれる御匂ひ、闇はあやなし　と　ひとりごたる　（若菜上）源

㋖猫をまねきよせてかき抱きたれば、いと香ばしくて、らうたげにうちなくもなつかしく思ひよそへらる、ぞすき〴〵しや　（同）女三

㋗和琴をひきよせ給へれば、律に調べられて、いとよくひきならしたる、人香にしみてなつかしうおぼゆ　落葉宮

㋘若君の一夜とのゐしてまかりいでたりし。匂ひのいとをかしかりしを、人はなほと思ひしを、宮のいと思ほしよりて、「兵部卿の宮にちかづき聞えにけり。むべ我をばすさめたり」と気色どりあじ給ひしこそをかしかりしか」　（紅梅）匂宮

「あなたのつまの紅梅…折りてたてまつれたりしなり。移り香はげにこそ殊なれ…」　（同）匂

㋙なごりさへとまりたる香ばしさを、人々はめでくつがへる　（竹河）薫

㋚小袿かさなりたる細長の…人香なつかしうしみたるを、とりあへたるま、かづけ給ふ　（同）玉

㋛宿直人、かの御脱ぎすての艶にいみじき狩の御衣どもえならぬ白き綾の御衣の、なよ〳〵といひしらず匂へるをうつしきて、身をはたえかへぬものなれば、似つかはしからぬ袖の香を人ごとに咎められ、めでらる、なむ、なか〳〵狭かりける。心にまかせて身をやすくも振舞はれず、いとむくつけきまで人のおどろく匂ひを、失ひてばやと思へど、所せき人の御移り香にて、えもす、ぎすてぬぞ、あまりなるや　（橘姫）薫

㋜かの御移り香　もてさわがれし宿直人ぞ鬢多かいふつらき　（椎本）

㋝御移り香のまぎるべくもあらずくゆりかをる心地すれば　とのゐ人がもてあつかひけむ思ひあはせられてまことなるべしといとほしくてぬるやうにて物ものたまはず　（總角）

㋞たぐひ少なげなる朝けの姿を見をくりて、名残とまれる御移り香などもえ人知れず物あはれなるはざれたる御心かな　（同）

㋟かの人の御移り香のいとふかうしみ給へるが…単衣の御衣などもぬぎかへ給ひてけれどあやしう心より外にぞ身にしみにけり……

「又人になれける袖の移り香をわが身にしめて恨みつるかな」　（宿木）

かかる御移り香などのいちじるからぬをりだに　（同）

㋠より居給へりつる廂木柱も茵も名残にほへる移り香、いへばいと殊更めきたるまでありがたし　（東屋）

㋡名残をかしかりし御移り香も　まだ残る心地して恐ろしかりしおもひいでらる

○大将殿の出で給ふなりけり…げにいとかうばしき香のみちてかしらいたきまでありつればげにさなりけりとおもひあはせ侍りぬる　つねにいと香ばしう物し給ふ君なり　（夕霧）匂の

「人香」――衣服に移った体臭、薫香を焚きしめた衣服を着馴れているうちに、自然、その人の体臭がしみこんで、その人物㋐空蟬、㋑玉鬘の「人香」となっている。㋒愛のたしかめ、㋓優美の形成。

「移り香」という場合、この「人香」―源氏㋕、匂宮㋖―が若君㋗、小君㋘の衣に移り香としてしみこんでいるのを咎められる。小事件の契機。その人物が立ち去った後まで、余香として漂うている、㋡。優美の形成。

源氏の人香のしみこんだ衣服―もとよりすぐれた香をたきしめて源氏は身にまとうた、そのうちに源氏の体臭もしみこんで――を、源氏は偲ばれようと明石におくる㋔。愛の伝達、感覚によるたしかめ、の役を果させる。

源氏の帰った後、その人香が茵に余香としてのこっているのを賞讃する女房達、㋝。憧れを秘めてうとましく思う藤壺と対比させる

ことによって、複雑、深刻な美の雰囲気が創出される。源氏の余香㋕、薫の余香㋖その美形成にやくたてる。匂の移り香に「人しれず物あはれなる」中君を、「されたる心地かな」と作者は評する。この形成は、匂と中君夫妻の幸福な縁を予想せしめ、ほほえましさに安らぎをさへ感じさせる香気のはたらきである。そこに大君とちがって、「異性の愛を感じる中君」の姿を創り出したのである。

㋗は、女三宮の人香が、彼女が常に抱く愛猫に「かうばしく」うつっている。柏木は「なつかしく思ひそよへらるる。

㋘は落葉宮の手馴れた和琴に、彼女の「人香」がしみている。夕霧はそれを「なつかしう」思う。

㋙㋚㋛は、いただいた衣服に、薫の移り香が強すぎて、迷惑した宿直人。中君に接近した為に中君の衣にしみついた薫の移り香に困惑した㋜。

(一)凝りに凝った薫香をたきしめた衣服、扇、料紙等々の美に陶酔する段階、普通の場合

(二)それらの衣服、持物を手馴らした人物の体臭もしみこんで、「人香」となったのを賞する段階、これは、一層鋭敏な感覚美の世界である。

(三)更に、それらが他の衣服、茵、猫、和琴、枕などにしみついたのを賞する段階。それらが、余香として、後迄空中にのこり漂う段階。

薫の場合は、素晴しい体臭が強烈で、牛頭栴檀の香とまがう程、これはまさに、艶なる世界の嗅覚による形成である。

「移り香」と事件の契機

①薫が大君に接近した為に、きわやかな移り香で、何事もなかったにもかかわらず、中君は、さては、と疑う㋝。薫と大君との仲を確信することとなる。薫と中君とを結びつけようという大君の説得は功を奏さない。薫と中君との間柄は永久に交わる事なき並行線の運命へ向ける契機。

②匂宮の留守中、薫が中君に接近し、もとより何事もなかったが、着換えても消えぬ薫の移り香で、匂宮の疑いは決定的となり、中君は窮地に立つこととなり、読者をハラ〳〵させる構成展開。これ亦薫の移り香が契機。

③女三宮の愛猫は、飛び出た為、宮は柏木に姿をみられる契機となった。重ねて、わりなき心地のなぐさめに猫をまねきよせて、かき抱きたれば、いと香ばしくて、うつたげにうちなくもなつかしく思ひよそへらる、女三宮の人香にしみた猫は、決定的に柏木を惑わせることとなる。猫好きの春宮にはたらきかけて、巧く猫を入手、身近にいつくしむ中、思慕は極限状態になり、遂に過失を犯し、死にいたる悲劇の契機となる。ねうねうと甘えかかる猫は、柏木には、「なつかしうらうたげにやは〳〵と」「おほどき美しげな」女三宮その人と思われた。しみていたその人香、それは、じつに官能的で、新奇、重要で、何とも艶な、かなしいモチーフ設定である。

Ⅵ しめり、ぬれの美

○げにやつし給へるとみゆる狩衣姿の、いと濡れしめりたるほど、うたてこの世の外の匂ひにやとあやしきまで薫りみちたり (榎姫)

○雨はひや〳〵かにうちそゝぎて秋果つる気色のすごきにうちしめりぬれ給へる匂ひどもは世の物に似ず艶にて うちつれ給へるを山賤どもはいかゞ心惑ひもせざらん (總角)

○道の程に濡れ給へる香の所狭う匂ふももて煩ひぬべけれど …… (浮舟)

○御気色なまめかしくあはれに夜深き露にしめりたる御香のかうばしきなど　（同）

露や雨に濡れしめった衣は、一層、きわだった香を放つ。鋭敏にそれを捉え、形成する。それは、実に

○うちしめりたる御匂ひ、とまりたるさへうとましくおぼさる……　（薄雲）

という感覚となるのである。優艶の極は、衣服に焚きしめた薫香、薫の体から放つ香気の、しめった匂いで形成されたのである。そもそも薫香は、樹下の地中に埋められるものである。梅枝巻「右近の陣のみかは水のほとりになすらへて西の渡殿の下よりいつるみきはちかううつませ給へるを」に河海抄は注していう。

御溝水　近来東庭……承和御時右近衛陣の御溝水の辺の地にうつまる。後代相伝して其所をたかへす云々。埋薫物日数事、長寛公主三日姚家七日極要方盛白桑中地を掘こと三尺以上用水辺地得朝陽埋之　公忠朝臣方云　黒方侍従春秋五日夏三日冬七日埋梅樹下云々　致忠朝臣云　合香之後　物に入て花木の下の土の中の高きところに埋之知章朝臣云　埋五葉松下　春秋七日夏五日冬十日

十種以上の香木類が細挽され、絹でこして粉末とされ、蜜で交ぜあわせ、「擣一千杵」、瓷器中に入れて土中に埋めるという。湿気が香には必須なのである。

Ⅷ　追風の美

①空薫物心にくく薫りいで、名香の香など匂ひみちたるに、君の御追風、いと殊なれば、うちの人々も心づかひすべかめり　（若紫）

②追風なまめかしく吹きとほし、けはひあらまほし　（朝顔）源258

③明石の御方にわたり給ふ。ちかき渡殿の戸おしあくるより、御簾のうちの追風、なまめかしく吹き匂はして、ものより殊にけだかくおぼさる……わざとめき由ある火桶に侍従くゆらかして、物ことにしめたるに、衣被香（えびかう）の香のまがへる、いと艶なり　（初音）385 386

④いといたう心して空薫物、心にくきほど匂はしてつくろひおはするさま……うちよりほのめく追風も、いとゞしき御匂ひのたち添ひたれば、いと深く薫りみちて（源の）　（螢）

⑤吹きくる追風は、紫苑ことぐ〳〵に匂ふそらも、香の薫りも、ふればひ給へる御けはひにや（秋好の）　（野分）

⑥花たちばなの月影にいときはやかに見ゆる薫りも追風なつかしければ　（幻）316 317

⑦香のかうばしきぞ、この世の匂ひならず、あやしきまでうちふるまひ給へるあたり遠く隔たる程の追風もまことに百歩の外もかをりぬべき心地しけり……藤袴も…追風殊に…まさりける　（匂宮）薫335 336 337

⑧柴の籬をわけつゝそこはかとなき水の流れどもを踏みしだく駒の足音もなほしのびてと用意したまへるに、かくれなき御匂ひぞ風に従ひて主しらぬ香とおどろくねざめの家〳〵ありける　（橋姫）

⑨あやしく香ばしく匂ふ風の吹きつるを思ひかけぬ程なれば驚かざりける心おそさよ　（匂）　（同）

⑩風につきて吹きくる匂ひのいとしるくうちかをるに　ふとそれとうちおどろかれて御直衣たてまつり（薫）　（総角）薫

⑪御前近き紅梅の色も香もなつかしきに、風のさと吹き入るゝに花の香もまらうどの御匂ひも橘ならねどもむかしを思ひいでらるゝ　（早蕨）

⑫召し出づるも甲斐ありて　遠くよりかをれる匂ひよりはじめ、人にことなるさましたまへり　（宿木）

追風とは、源氏物語においては、

(A)人物の動作によって微風が起り、そのたきしめた香り、或はその人物の体臭（薫の場合）があたりに流れる場合①④⑤⑦⑫

(B)花の香、人物の衣服にたきしめた香、人物の体臭、空たきものの香が、風によって漂ってくる場合②③⑤⑥⑧⑨⑩⑪

(C)風とは気付かぬが、かすかな空気の流通によって、人物の衣服にしめた香、花の香、体臭、空たきもの　が、あたりに漂ってくる場合③

追風の主

A　源氏①④　秋好中宮⑤　薫⑦⑫

B　源氏②　花橘⑥　秋好中宮⑤。薫⑧⑨⑩⑪

C　明石③

それぐ〳〵の素晴しい優艶の美を形成するのが追風である。

紫式部が、いかに嗅覚美を使って、源氏物語世界、優艶の世界を創りあげているか、について、今回は一応概観したところである。

（源氏テキスト・岩波文庫・山岸氏本）

註(1)　拙著「枕草子論」（笠間書院刊）参照ノコト。